

辺野古通信

第28号 2012年6月15日



5月14日の辺野古

発行: 沖縄の自立解放闘争に連帯し、反安保を闘う連続講座(沖縄講座@横浜)
沖縄講座 HP <http://www.7b.biglobe.ne.jp/~okinawa-koza/>

突陥り、オスプレイ七月配備を許すな!

■注目された6月10日の沖縄県議選は、保守県政与党が現有議席21に留まり、野党・中道が1議席増の27を獲得。民主党は県連幹事長が落選するなど1議席となる惨敗(前回選挙では4議席)。普天間基地の県内移設拒否の民意の強さを改めて示した。■5月12日から15日まで、沖縄講座は16回目の沖縄ピースフルツアーを実施した。(報告は2・3頁参照)1月から激動が続く沖縄だが、この4日間にも様々な動きがあった。12日に琉球新報一面トップで、MV22 オスプレイが7月に那覇軍港に搬入されて組み立てられ、試験飛行や安全点検の後、10月に普天間に本格配備されると暴露した。保守系の県知事も那覇市長も宜野湾市長も「安全なら日比谷公園や新宿御苑に持ち込めるか」(仲井真知事)と怒りは収まらない。14日には沖縄タイムスが、14日未明に米軍のPAC3展開訓練が実施されたことを報じた。嘉手納基地のPAC3発射機12機、車両26台が普天間、キャンプコートニー、伊江島などに展開した。「復帰40年を迎える15日の前日に、公道を使用した大規模移動は県民感情を逆なでし、一層の反発を招くのは必至だ。」(同紙)4月には自衛隊が、北朝鮮の「ロケット」騒動を口実に沖縄・八重山諸島へのPAC3配備を大々的に展開したばかりだ。■問題のオスプレイだが、4月のモロッコでの墜落事故を米国は「人為的ミス」と主張。森本敏新防衛相は6月5日の記者会見でモロッコの事故の調査報告がオスプレイの普天間配備後にずれ込むことを示唆。7日、民主党沖縄県連がこの発言に抗議し辞任を要求する緊急声明を発した。8日、米側から「オスプレイに不具合なし」の連絡を受け防衛省が「現時点で問題ない」と発表。

と発表。防衛大臣が誰になろうと、米側の言い分を鵜呑みにする姿勢は変わらない。その後、岩国がオスプレイの搬入・組立・安全点検・短期間の試験飛行を受け入れたとも伝えられている。6月14日、米国フロリダ州でCV オスプレイ墜落事故のニュースがまた飛び込んできた。17日、オスプレイ配備に反対する宜野湾市民大会が開催される。■5月20日、横浜市開港記念会館に約70名が集まり、琉球新報政治部長の松元剛さんの話を聞く集会が開催された。すべての基地にNOを! ファイト神奈川の主催、神奈川平和運動センターと沖縄講座後援。「民主主義の成熟度問う沖縄一命の二重基準と「負担軽減」の虚飾」と題して、沖縄の現状を分かりやすく解説した。■5月26日には沖縄講座も参加する基地撤去をめざす県央共闘会議第13回定期総会が大和市生涯学習センターにて開催された。代表には厚木基地爆音防止期成同盟書記長の岡本聖哉さん、事務局長に湘北教組の篠原恵美子さんが再任された。総会では、総会宣言とともに、5月22日から24日に強行された米空母艦載機離発着訓練への緊急抗議アピールが採択された。総会の間も、艦載機の爆音が轟いた。第二部では岩国市議の田村順玄さんが岩国の現状を講演。自民党市長になってからの補助金漬け行政の実態を報告した。



■辺野古・高江カンパは累計1,286,785円(6月9日現在)。引続きカンパを! 郵便 00210-0-2021 沖縄連続講座

「復帰」40年の現実を撃つ沖縄の闘い

沖縄講座のピースフルツアーは16回目。5月12日から15日まで、高江と辺野古の座込み現場訪問、県民大会、ゲート前行動、「復帰」40年記念式典抗議行動、沖韓連帯集会、シンポジウムと駆け巡り、「復帰」40年の現実—軍事植民地状況からの脱却を求める沖縄の人々の闘いに触れた。(13日と15日に絞って報告)

13日(日)

1週間前から沖縄は梅雨入り。しかし、きょうは晴れ間がのぞいて蒸し暑い。

11日から歩き続けている平和行進の部隊は、最終日の13日は普天間飛行場を囲むようにデモ行進、昼ごろから宜野湾市海浜公園屋外劇場に続々と結集。14時から県民大会が始まった。沖縄平和運動センターの山城博治さんの元気な開会宣言とシュプレヒコールが約3000人結集した屋外劇場に鳴り響く。自衛隊の南西諸島配備問題を訴えた与那国改革会議から始まり、第三次嘉手納爆音訴訟団、普天間爆音訴訟団、ヘリ基地反対協、高江住民の会からそれぞれ闘いの報告。沖縄の抱えている焦眉の課題が浮き彫りになった。

普天間爆音訴訟団の島田善次団長は、ヤマトからの参加者約1500人に問いかけた。

「安保も抑止力も必要と言うなら、基地を引き受けてほしい。悪いところはすべて沖縄に押し付ける。醜い日本人の姿だ」

会場は、一瞬静まり返った。「基地を引き受けてほしい」この問いかけは、翌日の沖縄タイムスが「本土で基地どうですか」「沖縄の問い探る答え」「県外参加者に島田さん主張『地元で考えて』」と大きく取り上げた。軍事植民地状況の根源にある日米安保を支持する大多数のヤマト(日本)国民と政府が、沖縄に基地を押し付け続ける「構造的差別」への告発だ。

ヘリ基地反対協共同代表の安次富浩さんはオスプレイ配備阻止の闘いの重要性を訴えた。

「年末年始の辺野古アセス評価提出阻止行動で、防衛省の思惑を吹き飛ばした。保守系の知事ですら、『辺野古の基地建設はできない』と言わざるを得ない。オスプレイ配備は、第2第3の宮森小学校ジェット機墜落事故が起こること。こんなことが許せますか。年末年始の辺野古埋立申請を阻止する闘いの前段として、オスプレイ配備を潰したい」

濟州島の海軍基地建設阻止闘争を闘う韓国の仲間が横断幕を持って登壇すると、場内は最高潮。平澤(ピョンテク)平和センターのカンサ



ンヨンさんから熱烈な国際連帯のアピール。

「沖縄の『復帰』は、未完成だ。真の『復帰』は、沖縄の人びとが自らの運命を自己決定できるようになる時だ。普天間基地が閉鎖され、辺野古新基地建設計画が白紙に戻った時、沖縄に毒キノコのように根を張る米軍基地をすべて撤去させた時、その時こそ『復帰』の始まりだ。」
「銃や剣があれば、平和が守れるのか。銃や剣をすべて溶かして農機具を作り、作物を育てることこそ、平和だ。ジュゴンが静かに回遊し、普天間周辺の人びとが静かな空を取り戻すことが平和だ。」
「いま、国家権力、警察、右翼団体に立ち向かい、拘束されることも怖れずに闘っている濟州島のカンジョン村の人びとに、みなさんの拍手を送ってほしいと思う。」
「みなさんのこの拍手と応援を、濟州島の仲間に伝えたい。」
「沖縄の問題は韓国の問題だ。そして韓国の問題は、日本、沖縄の問題だ。そのことに気付いた時、私たちの連帯活動はもっともっと広がる。つながりましょう。」



なお、濟州島のカンジョン村の海軍基地建設反対闘争については、5月14日に宜野湾市民会館で開催された「”韓・琉 ちむどんどん2012”」の第一部で上映された記録映画「カンジョン」を見ることができた。

このあと平和行進参加者の報告と決意表明が続き、最後に復帰40年大会宣言を採択、頑張ろう三唱で閉会。終了後、普天間基地へ向かった。

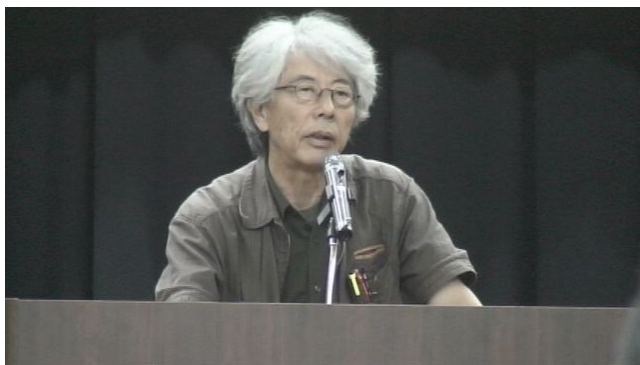
17時、普天間基地第1ゲート前広場で「オスプレイ配備を断じて許さない怒りの県民集会」が開催された。主催は県内移設反対県民会議+

けた連帯活動の重要性を訴えた。アイヌ民族からの連帯アピールに続き、竹富島の石垣金星さんから与那国島の自衛隊配備問題と八重山地区の教科書問題、沖国大の渡名喜守太さんから首里城地下壕説明板の「慰安婦」「日本軍の住民虐殺」の文言削除問題が報告された。続いて辺野

古の安次富浩さん、高江の伊佐真次さん、泡瀬の小橋川共男さんからそれぞれの闘いの報告。石垣金星さんのミニコンサートと最後にシュプレヒコールで集会を閉めた。沖縄が抱える諸課題とアジア太平洋レベルの先住民族の連帯活動の重要性など、盛り沢山の3時間だった。

仲里効さん講演要旨

〈復帰思想=内面化した植民地主義〉を問う



40年を様々な領域で問い返す試みがされている。沖縄の歴史意識の特徴は、「時間の組織化」。我々が歳月を重ねることは、時間をどう組織していくのかということ。主体をどう審問し組織化していくのか。40年は長いようでとても短い。40年かけて、初めて40年前に辿り着いた。当時のメインストリームである復帰運動を近代にまでさかのぼって内在的に批判したのが反復帰論だが、この反復帰論の登場によってはじめて沖縄の近代が思想を持つことができた。そこで言われたことは、40年前の過去の出来事ではなく、まさに今、問われていることではないか。

1968年に出版された『沖縄本土復帰の幻想』という本の中で、いれいたかしさんが、「復帰運動の質的転換を図るべきだ」と主張した。ちょうど三大選挙があり沖縄の革新共闘が成立し「1968年体制」が形成される時期。日本の政治では55年体制という言い方があるが、沖縄の政治文化を特徴づけたのは68年体制。この68年体制の最も限界点で思考したのがいれいたかしさん。この復帰運動の良質の部分の主張に一人だけ異議を唱えたのが川満信一さん。彼は復帰運動の質的転換ではなく、止揚を唱えた。復帰運動を解体しなければ沖縄の新たな展望は開けない。そう主張した。この論争は、「復帰」について考える上で、重要な意味を持つ。

もうひとつ、沖縄タイムスの、大田昌秀さんと知念ウシさんの往復書簡がある。知念さんは、沖縄の人たちがなぜ日本に復帰することを選んだのか、これを問うている。これに対し、大田さんは真正面から答えていない。これはぐらかしはな

ぜか。これが40年かけてたどり着いた時間の組織化、あるいは主体の組織化に関わる問題ではないか。はぐらかしの中に見える何か本質的な問題があるのかもしれない。冷戦の本格化と剥き出しの占領の中で、〈反米〉の組織化が進み、ナショナリズムの潜在的記憶が動員され、日本の〈祖国〉化に結果する。そういう意味では、復帰運動を中心的に担った人物や組織が内面化した植民地主義—復帰思想の根深さを指摘せざるを得ない。

知念さんのもう一つの問いは、世界の植民地解放運動の中で、沖縄の日本復帰運動は珍しい例でしょうか、というもの。それだけ日本の沖縄への植民地政策は徹底していたということ。戦前の同化主義を戦後の文脈で再組織化していく。二重の内面化された植民地主義が日本復帰運動の中に流れ込んでいる。ここに沖縄近代のアポリアがある。沖縄における主体の組織化の問題、言い換えれば沖縄の民衆意識の内的境界意識の問題だ。大国に翻弄された境界域に住む人々のアイデンティティの形成の仕方が、内的境界意識の重層性として現れる。日本の主体意識は単一。沖縄における主体意識は何度も書きかえられている。内的境界意識の脱臼や迂回やアポリアの問題を今現在、新たな形で沖縄が発明しなおしている。これは「40年かけて40年前に辿り着いた」の言葉に表現されている。

高嶺剛さんの1989年の「ウンタマギルー」は、沖縄が内的境界意識を組織しなおしていく映像表現となっている。オープニングとエンディングをいつも思い起こす。沖縄は転換期。現状維持か独立か。占領時代は沖縄が夢を語れた時代だ。これがエンディングでは「きょうから沖縄は日本だ」と言い放って、自爆テロを起こす。沖縄の自己決定権、自立が失われたことを象徴する。もうひとつの見方は、自己決定権と沖縄ドリームを自爆によって守った。自爆によって守った沖縄ドリームを、逆説的に、沖縄の若い世代が新たなことばと文体で発見しなおしていく。そういう映画となっている。

(編集部の責任で要旨をまとめました)